

「白系ロシア人」音楽家カテリーナ・トドロヴィチの日本滞在(2)  
—1920年代から離日まで—

**The Stay in Japan of a ‘White Russian’ Pianist,  
Katerina Todorović (2):  
Her Career from the 1920s to 1940**

柴 理子 (城西国際大学)

**Riko SHIBA (Josai International University)**

「白系ロシア人」音楽家カテリーナ・トドロヴィチの日本滞在(1)—1910年代末までの足跡— (『中欧研究』第2号、2016年11月所収)<sup>1</sup>

はじめに

1. 来日まで

(1) 生い立ち

(2) トドロヴィチ夫妻の出会いと来日の経緯

2. 1910年代前半までの演奏活動

(1) 日本楽壇へのデビュー

(2) 日本人音楽家との出会い

3. 1910年代後半の演奏活動

(1) 第一次世界大戦中の動静

(2) ポーランド人ピアニスト・ザレスカとの共演

(以下、今号)

4. 1920年代の演奏活動

(1) オルガ・カラスロヴァとの出会い

(2) ヨゼフ・ケーニヒとの出会い

---

<sup>1</sup> この拙稿 (以後、柴 理子論文 (2016) と略記) には以下のリンクからアクセス可能。<https://www.josai.ac.jp/jices/common/pdf/2-1.pdf>

5. ピアノ教師として

(1) 門下生たち

(2) 花園会ピアノ発表会

6. 1930年代の動静

(1) 弟アニシムの来日をめぐって

(2) 1930年代の演奏活動

(3) 離日

おわりに

**Abstract**

This paper follows the life in Japan of pianist and piano teacher Katerina Todorović (1877-1974), from the 1920s to 1940, the year she and her husband Dušan Todorović (1875-1963), departed for the United States shortly before the outbreak of World War II in Asia. The first phase of Katerina's 31-year residence in Japan is covered in this author's 2016 paper, 'The Stay in Japan of a 'White Russian' Pianist, Katerina Todorović (1): Her Career until the 1910s.' Katerina came to Japan in April 1909 accompanying her husband, who had accepted a position as Russian language instructor at the Tokyo School of Foreign Languages (today's Tokyo University of Foreign Studies) and the Imperial Japanese Military Academy. Although born into a Jewish family in Bessarabia, present-day Ukraine, Katerina identified as "White Russian" during her time in Japan. This paper sheds light on the interactions between émigré European musicians and leading members of Japanese society in the interwar period.

**Key words:** Katerina Todorović, Dušan Todorović, Bessarabia, emigrants from Eastern Europe, national identity, Jewish pianists, White Russians, history of Japanese reception of Western classical music, piano education in Japan before WWII

#### 4. 1920年代の演奏活動

##### (1) オルガ・カラスロヴァとの出会い

1919年12月3日のシベリア出征軍人のための「恤兵音楽会」<sup>2</sup>の後、1年余りの空白を経て、カテリーナは1921年2月9日・10日の二夜にわたり神田青年会館で開かれた「三味線四部合奏会」への出演で演奏活動を再開した。この演奏会は、ドブロホトフというバラライカ奏者による「三味線を西洋音楽に応用して」と題する講演の後、チャイコフスキーの弦楽四重奏曲「アンダンテ・カンタービレ」やボロディンのオペラ「イーゴリ公」などのロシア作品が三味線による合奏で演奏されるというユニークなものであった<sup>3</sup>。ドブロホトフとは大戦中の1918年6月に連合軍慰問事業として行われた「露伊声楽舞踊会」で一度共演しており<sup>4</sup>、おそらくはその縁から再度の共演が実現したのであろう。

さらに6月25日には、同じく神田青年会館で開催された「文化宣伝協会の主催音楽会」で、ショパンのバラード第一番とリストの演奏会用練習曲（何番かは不明）を演奏している。こちらは、地方から勉学を志して上京する若者のための「学生寄宿舍」と転職・求職のために上京する人々の無料の宿舎「老人ホーム」を兼ねた建物の建設資金調達を目的としたチャリティーコンサート<sup>5</sup>であり、第一次世界大戦とロシア革命による混乱が終息に向かい始めた後も、カテリーナが変わらず慈善活動に励んでいたことがわかる。

ところが、この2つのコンサートの後、カテリーナの演奏活動はぶつりと途絶えてしまう。1920年代初めは、上の息子たちが大学進学のためアメリカに渡り、またドゥシャンが末息子のヴィクトルを伴って第一次世界大戦後に新たな独立国家となった祖国を訪れる<sup>6</sup>など、トドロヴィチ家にとって何かと変化の多い時期だったのは確かである。しかし、それより何より、1923年9月1日の関

---

<sup>2</sup> 『音楽界』第21巻第207号、1919年1月、50-51頁。

<sup>3</sup> 『音楽界』第23巻第233号、1921年3月、39頁。

<sup>4</sup> 『音楽界』第20巻第202号、1918年8月、38頁。

<sup>5</sup> 『音楽界』第23巻第238号、1921年8月、20-21頁。

<sup>6</sup> ベオグラードの日刊紙『ポリティカ』の日本特派員でトドロヴィチ夫妻と親交のあったブランコ・ヴケリッチが、トドロヴィチ夫妻の離日直後の1940年8月に書いた夫妻についての回想記事には、「トドロヴィッチ夫妻は、事情が許せば、二十年近く見ていないユーゴスラヴィアへも近くもう一度行ってみたいと思っている」とある。ここからは、ドゥシャンのみならずカテリーナも1920年代（厳密には1921年）に一度ユーゴスラヴィアに行ったようにも読めるが、遺族の許に残されている写真や絵はがきの文面からは、カテリーナが同行したという形跡は確認できない。ブランコ・ヴケリッチ著、山崎洋編・訳『ブランコ・ヴケリッチ 日本からの手紙 ポリティカ紙掲載記事（1933～1940）』、未知谷、2007年、281頁。

東大震災が決定的な要因であったことは疑いを容れないであろう。

震災当日、カテリーナ自身はドゥシャン、ヴィクトルと親子三人で長崎・雲仙温泉に家族旅行に出かけていて難を逃れた。ドゥシャンがベオグラードに送った「日本の大惨事」と題する9月7日付のルポルタージュによると、3人はちょうど東京に戻る途中だったが、東京と横浜からの避難民でごった返す軽井沢で足止めを食い、そこから先に進めなくなったという<sup>7</sup>。地震発生からまる1週間経ってようやく、3日分の水と食料を持って軽井沢を出発し、東京まで通常5時間のところ倍以上の12時間もかかって、8日午前11時に麻布区新竜土町（現在の港区六本木）の自宅にたどり着いた。地震後に発生した火災で東京市の約43パーセントが焼失したという未曾有の大災害のなか、トドロヴィチ家の周辺は奇跡的に火災を免れ、屋根ははがれ落ちてしまった（屋根瓦が落ちた？）ものの、建物内部に大きな被害はなかったという<sup>8</sup>。

震災後に確認できるカテリーナの演奏活動の最初の痕跡は、中断から5年近い空白を経て1926年4月29日に「青山高樹町コミュニティセンター」で開かれた「オルガ・カラスロワ嬢独唱会」である。「トツロウィッチ夫人賛助出演」とあるから、伴奏者としての出演であろう<sup>9</sup>。1920年代後半、カテリーナは日本における西洋音楽の発展に重要な貢献をした二人の音楽家と出会っている。その一人が、オルガ・カラスロヴァ（Olga Karosulova 生没年不詳）であった。

カラスロヴァはペテルブルク音楽院卒業後、イタリアとフランスで研鑽を積み、ミラノのスカラ座、パリのオペラ＝コミック座、モナコのモンテカルロ歌劇場などヨーロッパの一流の劇場への出演経験をもつ、「極東に於けるロシア系の歌手の中で一番優れて居る」ドラマチック・ソプラノ歌手であった。ロシア革命後にいったんロシアに戻ってペテルブルクのマリンスキー劇場で歌っていたが、結局は亡命の道を選んだという<sup>10</sup>。来日後は神戸に居を定め、演奏活動を続けるとともに、宝塚音楽学校で声楽教授をしていた。1914年に創設された宝塚歌劇団は、亡命ロシア人に多くの演奏機会や職場を提供していたのである<sup>11</sup>。カラスロヴァの主な生徒はタカラジェンヌであったが、門戸をたたく音楽家がいれば部外者であっても快く受入れて指導した。日本におけるイタリア・オペラの草

---

<sup>7</sup> ドゥシャンのルポはベオグラードの雑誌『ヴェナツ』、日刊紙『ポリティカ』の両方に掲載された。Воро Мајданац, *Отаџбини из јапана---Животном стазом родољуба Душана Тодоровића*, Државни Архив Србије, Београд, 2022, p.70.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.72.

<sup>9</sup> 『東京朝日新聞』1926年4月29日付朝刊。

<sup>10</sup> 『フィルハーモニー』1928年5月号、33頁。

<sup>11</sup> ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』成文社、2010年、88-89頁。

分けとされるテノール歌手、中川牧三（1902-2008）も、1920年から師事した教え子である<sup>12</sup>。

当時、阪神間には1917年のロシア革命後に満州やウラジオストクを經由して神戸に上陸したいわゆる白系ロシア人、民族的には主としてユダヤ人、ウクライナ人、ポーランド人等の音楽家が多数在住した。彼らは1920年代前半に現在の神戸市東灘区深江南町に建設された洋館街「深江文化村」を拠点として、亡命ロシア系音楽家の草分け的存在であるピアニスト、アレクサンドル・ルーチン（Aleksandr Rutin 1865-1932）を中心に関西における在日外国人音楽家のネットワークを形成しており、カラスロヴァもその一翼を担っていた<sup>13</sup>。このネットワークには、関西在住の白系ロシア人音楽家のみならず、ルーチンの異母弟にあたるヴァイオリニストのアレクサンドル・モギレフスキー（Aleksandr Mogilevskii 1885-1953）、ピアニストのレオ・シロタ（Leo Sirota 1885-1865）ら東京在住の音楽家、ドイツ人のチェリストで指揮者のハインリヒ・ヴェルクマイスター（Heinrich Werkmeister 1883-1936）、オーストリア人指揮者ヨーゼフ・ラスカ（Joseph Laska 1886-1964）らの非ロシア人音楽家も加わり、さらには彼らを師と慕う作曲家・指揮者の山田耕筰、指揮者の近衛秀麿ら日本人の音楽家も集っていた。

カテリーナが関西を拠点に活躍するこの外国人音楽家たちのネットワークとの接点を持っていたことは興味深い。1928年5月16日、東京・千駄ヶ谷の日本青年館での「新響 予約演奏会第29回」は、指揮・近衛秀麿、ピアノ独奏・カテリーナ・トドロヴィチ、独唱・オルガ・カラスロヴァという顔ぶれで、まさにこうした交流関係に基づいて企画されたものと思われる（文末の【写真1】を参照）。この日の演奏会では、カラスロヴァがグリーンカのオペラ「ルスランとリュドミラ」よりゴリスラヴァのアリア「愛しの星よ」、チャイコフスキーのオペラ「スペードの女王」よりリーザのアリア「夜半になりて」というロシア2つの作品を、カテリーナは得意のリストの作品からピアノとオーケストラのための「ハンガリー幻想曲」を披露している<sup>14</sup>。

カテリーナは個人的にもカラスロヴァと懇意にしている、カラスロヴァが演奏会で上京する折にはトドロヴィチ宅に滞在するという仲であった。1930年に

---

<sup>12</sup> 日本イタリア協会ホームページ：<http://www.nipponitalia.com/makizo/makizo01.html>  
（最終閲覧日：2023年12月31日）。

<sup>13</sup> 松井真之介「阪神間モダニズムが生み出した二人の音楽家：貴志康一と大澤壽人」『鶴山論叢』第11号、2011年3月、36-38頁。

<sup>14</sup> 『フィルハーモニー』1928年5月号、広告ページ（ページ番号なし）。

は「新交響楽団の肝煎りに依って毎週土曜上京、牛込河田町10トドロウヰツチ夫人宅に於て声楽を教授」していたという<sup>15</sup>。カテリーナの紹介でカラスロヴァに師事することになった一人に、戦前から戦後初期にかけて活躍したメゾソプラノ歌手の北澤栄（1908-1956）がいる。彼女は神戸に赴いてカラスロヴァのもとでみっちり勉強し、実の娘のように手取り足取り家事、語学、社交などを仕込んでもらい<sup>16</sup>、1933年にはかつて師が学んだイタリアに留学している。

## (2) ヨゼフ・ケーニヒとの出会い

1920年代後半にカテリーナが出会ったもう一人の重要な音楽家は、チェコ出身のヴァイオリニスト、指揮者のヨゼフ・ケーニヒ（Josef König 1874?75?-1932）である<sup>17</sup>。オーストリア治下にあったボヘミアの中心都市プラハに生まれたケーニヒは、幼時から音楽の才能を示し、プラハ音楽院でヴァイオリンを専攻、作曲家アントニン・ドヴォルザークに音楽理論を学んでいる。1892年のウィーン万国博覧会の際、全ヨーロッパの音楽家を選抜して編成されたオーケストラに弱冠17歳でボヘミア代表のヴァイオリニストとして参加し、さらにはロシアが誇るマリンスキー劇場交響楽団で20年以上にわたってコンサートマスターを務めるという、華麗な経歴の持ち主であった<sup>18</sup>。

そのケーニヒが来日することになったのは、1925年1月の「日ソ基本条約」で日ソ間の国交が樹立されたことがきっかけであった。日本の交響楽運動を牽引していた山田耕筰の発案で、ハルビンに亡命した帝政ロシアの一流の音楽家からなる東支（中東）鉄道交響楽団を招聘するという計画が1923年頃から浮上していたが、同交響楽団と日本交響楽協会（1924年創設）の日本人演奏家との合同演奏による「日露交歓交響管弦楽演奏会」を「日露修好記念事業」と銘打って開催することになり、その次席コンサートマスターにケーニヒが就任したのである<sup>19</sup>。ケーニヒはこの促成の日露混成楽団を見事にまとめ上げ、1925年4月26日から29日にかけて、関東大震災で焼失した後ようやく新装なった東京・歌舞伎座での4夜にわたる演奏会を成功に導いた。

<sup>15</sup> 『音楽世界』第2巻第12号、1930年12月、121頁。

<sup>16</sup> 中根弘「独唱者北澤栄子嬢のこと」『フィルハーモニー』1930年第13号（1月号）、19頁。

<sup>17</sup> ケーニヒは民族的にはチェコ人ではなくドイツ人だったようである。オーボエ奏者だった父親が故国ドイツからプラハに移り住んだのだという。岩野裕一『王道楽土の交響楽 満州—知られざる音楽史』音楽之友社、1999年、52頁。

<sup>18</sup> 同上書、46-47頁。

<sup>19</sup> 同上書、42-46頁。このオーケストラの首席コンサートマスターを務めたニコライ・シフェルブラットも、後にカテリーナと親交を結ぶことになる。

日本の洋楽史上初の画期的な試みとなったこのコンサートにより、本格的なオーケストラ演奏を日本の聴衆に聴かせるという所期の目的は達成されたが、外国の一流の奏者たちとの共演を通して大きな技量差を見せつけられたのもまた確かであり、日本側はオーケストラ育成のための外国人指導者の招聘を本気で考え始めることになる。同年7月12日に本放送を開始した日本初のラジオ局「東京放送局」(JOAK)が放送のための交響楽団として日本交響楽協会(日響)と契約を結んだのを機に、この日本初のプロのオーケストラの指揮者を探すことになり、そこで白羽の矢が立ったのがケーニヒであった。ケーニヒは日露交歓演奏会の後ハルビンに戻っていたが、日本側からのオファーに応じ、同年11月、JOAKの専属指揮者兼独奏者として再び来日した<sup>20</sup>。

かたやカテリーナのほうは、1926年4月29日のカラスロヴァとの演奏会の後、手の故障のため5月2日に開くはずだった自身のリサイタルをキャンセルしていた<sup>21</sup>が、半年後の11月21日、日本青年館で開かれたケーニヒとの「ソナタの夕べ」で演奏活動に復帰している。この演奏会はヴァイオリン・ソナタばかりを4曲弾くという重厚なプログラムであったが、注目すべきは、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェンという3曲のあとに、休憩をはさんでベルギーの作曲家ギヨーム・ルクー(Guillaume Lekeu 1870-1894)の「ヴァイオリン・ソナタ ト長調」を日本初演していることである<sup>22</sup>。JOAKの専属アーティストをしていたケーニヒとともに、カテリーナは1925年7月に登場したばかりの新しいメディアであるラジオへの出演も果たしており、翌27年1月29日の放送で再びこのルクーのソナタの伴奏をしている<sup>23</sup>。

カテリーナがクラシック音楽の本場のヨーロッパから遠く離れていながら、同時代の作曲家の作品や日本では演奏機会の少ない作品にも積極的に取り組んでいたのは、長くヨーロッパの第一線で活躍しヨーロッパの音楽事情に通じていたケーニヒからの影響も大きかったのではないか。ケーニヒが指揮した同年4月3日の「新響第5回予約演奏会」では、やはり日本初演となるアントン・ルビンシテイン(Anton Grigoryevich Rubinstein 1829-1894)の「ピアノ協奏曲第4番ニ短調」を演奏している<sup>24</sup>。

---

<sup>20</sup> 同上書、51-52頁。

<sup>21</sup> 『東京朝日新聞』1926年5月8日付朝刊。

<sup>22</sup> 『東京朝日新聞』1926年11月19日付および11月21日付朝刊。同じベルギー出身の高名なヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイの依頼により作曲された作品で、イザイに献呈され、初演もイザイによって行われた。将来を囑望されたが、24歳で夭折した。

<sup>23</sup> 『東京朝日新聞』1927年1月29日付朝刊。

<sup>24</sup> 『NHK交響楽団五十年史 1926-1977』日本放送出版協会、1977年。

## 5. ピアノ教師として

### (1) 門下生たち

従来はもっぱらピアノ教師として知られてきたカテリーナであるが、いつ頃からピアノを教え始めたのか、実は正確なところはわかっていない。彼女が一度も音楽学校等に所属することなく、もっぱら自宅を教室として個人教授という形で教えていたことから、教歴に関する公式の記録が残っていないためである。しかし、資料的な制約はあるとしても、ピアノ教師としてのカテリーナの活動を追ってみることは、大正から昭和戦前期にかけてのいわゆる「ピアノ教室」がどのようなものであったのか、その一端を知る上で興味深い。

教え子の一人でのちにプロのピアニストになった織本豊子（1916-1990）は、1920年、4歳の時にカテリーナについてピアノを始めた<sup>25</sup>。豊子に続いて妹の孝子も入門している。姉妹の父親の織本一雄は、東京・中野の新井村に外科医院を開業する外科医であった。織本家は江戸時代から続く商家であったが、商人になるのを嫌った一雄は医学を修め、彼の代から医者になったという。西洋音楽の素養はなかったが、趣味で三味線を弾き、玄人はだしの腕前を持っていた。豊子がピアノを習いたいと言い出すと、それならば西洋人の教師が望ましいだろうと、豊子をカテリーナに師事させた<sup>26</sup>。

豊子より一歳年上の井上園子（1915-1986）は、豊子とほぼ同時期に6歳で入門しており、父親が医者で娘の才能を理解しその財力によってサポートした点でも共通している。園子の父の井上達二は、東京大学眼科学教室の創始者として知られる父親の井上達也が1881年に東京・御茶ノ水に開業した「井上眼科病院」を継ぎ、第7代院長を務めていた<sup>27</sup>。

トドロヴィチ夫妻が日本を去る少し前の、1940年5月10日付『東京朝日新聞』のインタビュー記事には、「31年間の日本生活で前田利為侯夫人令嬢、木戸幸一侯夫人令嬢等二代にわたって教はった人も多い」とある。前田利為の長女・美意子の回想によると、母・菊子（1903年生まれ）はピアノを趣味とし、21歳で結婚したときには、婚礼道具として大方の令嬢たちがお琴を選ぶところを「スタインウエーのグランドピアノを持って嫁入りした」<sup>28</sup>というから、おそらく少

---

<sup>25</sup> 萩谷由喜子『クロイツァーの肖像—日本の音楽界を育てたピアニスト』ヤマハミュージックメディア、2016年、147ページ。

<sup>26</sup> 同上書、72-73頁。

<sup>27</sup> 同上書、70頁。

<sup>28</sup> 酒井美意子『ある華族の昭和史 上流社会の明暗を見た女の記録』主婦と生活社、1986年、85頁。



女時代から熱心に弾いていたのだろう。とすると、カテリーナはすでに 1910 年代から教え始めていた可能性がある。あくまで推測であるが、カテリーナは、来日間もない頃から行っていた演奏会や慈善活動、社交の場で知り合った華族夫人や令嬢に最初の生徒を獲得していったと考えられる<sup>29</sup>。1926 年生まれの美意子自身がピアノを始めたのは 1930 年代に入ってからであるが、回想記の次の一節からは、美意子通っていた女子学習院の生徒の令嬢たちがカテリーナの門下生の中核をなしていたことがうかがわれる。

トドロウィッチという白系ロシアの貴族夫人がピアノの名手として声望が高く、学習院の生徒達も大勢その門下に集まり、同期生には内大臣木戸侯爵の令嬢三姉妹や、のちの小坂徳三郎夫人・三井男爵令嬢などがいた<sup>30</sup>。

美意子は、同級生の頼みでその知り合いの下級生をトドロウィッチ先生に入門の斡旋をしてあげた、とも書いており、女子学習院の生徒の間に口コミで評判が広がっていた様子が見て取れる<sup>31</sup>。カテリーナにとっては願ってもない展開であったろう。

こうしたなか、カテリーナの指導で瞬く間に才能を開花させたのが井上園子であった。レッスンを受け始めてわずか 5 年後の 1926 年 5 月 16 日、近衛秀麿指揮の日本交響楽協会第 6 回定期公演にソリストとして登場し、モーツァルトの「ピアノ協奏曲第 23 番」を演奏したのである<sup>32</sup>。弱冠 11 歳にして楽壇デビューを飾った園子は、2 年後の 1928 年 5 月 16 日には早くも日本青年館でリサイタルを開いている。カテリーナはケーニヒとともに賛助出演し、愛弟子のソロ・デビューをサポートしている<sup>33</sup>。さらに、翌 29 年 5 月 9 日にケーニヒ指揮の新響第 49 回予約演奏会でベートーヴェンのピアノ協奏曲第 3 番を弾くことになった園子に、カテリーナはオーケストラとのリハーサルの段階から付き添っている<sup>34</sup>。園子は 7 月 10 日にラジオで新響と同じ曲の第 1 楽章を演奏した後、7 月

---

<sup>29</sup> 1910 年代のカテリーナの演奏活動や慈善活動については、柴 理子論文（2016）を参照されたい。

<sup>30</sup> 酒井、前掲書、107-108 頁。

<sup>31</sup> 同上書、108-109 頁。

<sup>32</sup> 『時事新報』1926 年 5 月 12 日付朝刊。以下のサイトに転載された記事を参照させていただいた。幸太のコラム《日本ピアノ文化史》より「15-B 井上園子の登場—1926 年」、<http://blog.livedoor.jp/bookshell/archives/1286358.html>（最終閲覧日：2023 年 3 月 31 日）。

<sup>33</sup> 『フィルハーモニー』1928 年 5 月号。

<sup>34</sup> 『フィルハーモニー』1929 年第 4 巻 6 号。

19日にウィーン留学に出発している<sup>35</sup>。この留学には近衛秀麿の助言もあったらしく、園子は一度も日本の音楽学校に在籍することなく、本場ウィーンで研鑽を積むことになる。カテリーナは園子に早くからステージ経験を積ませながらも、早熟な天才少女で終わらせることなく本格派のピアニストに成長させるために、海外経験の豊富な近衛やヨーロッパの音楽事情に詳しいケーニヒとも相談しつつ、園子を海外に送り出す決断をしたと思われる<sup>36</sup>。

とはいえ、当時の日本にあっては、まさに彗星のごとく現れた、この大曲難曲を軽々と弾きこなす天才少女は世間の大きな注目を集め、演奏会の出演情報のみならず、留学や一時帰国、さらには婚約、結婚、出産といった私生活に至るまで、時には写真入りで新聞等に報じられるというアイドルさながらの扱いを受けることになる。その善し悪しはともかくとして、こうした園子の活躍が、ピアノ教師としてのカテリーナの評価を大きく引き上げることになったのは間違いないだろう。事実、園子の演奏をコンサートで直に聴き、こんな素晴らしいピアニストを育てた先生にぜひ我が子を師事させたい、と思った人がいる。ピアニストで教育者の寺西昭子（1927-）の父、伊東貞雄である。実際、彼はすぐさま行動に移し、カテリーナと連絡を取ってレッスンの約束を取り付けたという<sup>37</sup>。

この伊東家もまた医者の家系であり、しかも貞雄の祖父・盛貞、父・盛雄と二代続けて天皇家の侍医を務めたという由緒正しい家柄であったが、貞雄は医学

---

<sup>35</sup> 『フィルハーモニー』1929年第4巻8号。

<sup>36</sup> 園子が留学先のウィーンから一時帰国して非公開の試聴会を開催した際に出た批評記事に、「恵まれた環境と、周囲の賢い注意とによってすぐれた才能が一つの良き完成に近づきつゝある一例がこゝにある。井上園子嬢は多年トドロウキチ夫人に学び、近衛秀麿子の助言の下に外遊、ヴキーンで研究をつんだ十九歳の少女である。世のいはゆる天才少女にありがちな商品化の危険を免れ、すでに優秀なる技術を獲得してゐるにもかゝらず、まだ未完成の一少女ピアニストとして非公開的の試聴会に止め、更に今後の精進によって最後の完成を期してゐる人である。（中略）嬢及びその周囲に望むところは、その決意を実行し現在の技術に満足せず、更に一層の努力をつゞけ、他日の大成を期せられんことである」とある（『東京朝日新聞』1934年5月11日付朝刊）。この批評を書いた牛山充（1884-1963）は、戦前の代表的な音楽雑誌『月刊楽譜』の主筆で、『東京朝日新聞』の音楽・舞踊欄も長く担当し、数多くの音楽・舞踊・美術コンクールの審査員も務めた。園子の演奏会に関しては中傷に近いような主観的・感情的な批評も散見されるなか、牛山は当時としては冷静かつ客観的な視点で評した評論家だったといえよう。

<sup>37</sup> 松本太郎『ピアノとともに生きる—寺西昭子のピアノ人生』さんこう社、2020年、61ページ。筆者が2016年に行った寺西昭子氏とのインタビューでも、このあたりのいきさつを詳しく聞くことができた。寺西氏は、カテリーナのもとに多くの生徒が集まったのは、本人のピアニストとしての実力や指導力もさることながら、夫のドゥシャンが東京外国語学校教授という立派な肩書きを持っていたことも奏功して上流階級の信頼を得られたのだろう、と指摘している。

を志すことなく周囲の反対を押し切って音楽の道に進んだ。ピアノを始めたのは13歳からと晩学であったが、日本のピアニストの草分け的存在である幸田延の薫陶を受け、ピアニストとしてはウェーバー「コンチェルトシュトゥック」をラジオ放送で披露し、大正天皇の御前演奏の榮譽にも浴したという実力の持ち主であった<sup>38</sup>。ピアノ教師としても多くの教え子を世に送り出し、日本交響楽団（NHK交響楽団の前身）の指揮者、作曲家として知られる尾高尚忠（1911-1951）の妻でピアニストの尾高（旧姓・長岡）節子もその一人である<sup>39</sup>。

カテリーナに師事する前の昭子はバイエルをどうにか弾いていた程度だったというが、1936年、8歳でレッスンを受け始めると、ハノン、ツェルニー、バッハを教材に徹底的に基礎を叩き込まれてめきめきと上達し、わずか1年あまりでモーツァルトのピアノ協奏曲を弾くまでになった<sup>40</sup>。カテリーナは先輩の園子の練習ぶりをしばしば引き合いに出し、昭子のやる気を引き出そうとしたというが、カテリーナがどの生徒にも同じように厳しい練習を課したかという点、そうではなかったようだ。昭子によれば、カテリーナの主な生徒層となっていた華族の令嬢たちや政財界の有力者の子女には本格的にピアノを勉強しようとする者は少なく、自分の生徒としては園子以来の才能の持ち主で人一倍練習熱心な生徒だった昭子に期待をかけてのことだった<sup>41</sup>。カテリーナの素顔を伝える資料は数少ないが、昭子によれば、レッスンを離れると穏やかで生徒の体調にも気を配るきめ細やかな優しい人だったという。

1938年、日中戦争開戦後にわかに戦時色が強まった日本から息子たちのいるアメリカへの移住を考えていたトドロヴィチ夫妻が、準備のために渡米する。この年4月1日に国家総動員法が制定されており、この頃から社会の雰囲気は急におかしくなった、と昭子は証言する。それを夫妻が感じていなかったはずはない。カテリーナは自分が留守にする数か月の間、昭子の指導を姉弟子の園子に託した<sup>42</sup>。帰国後も、おそらくは、ピアニストを目指す昭子の指導は第一線で活躍する園子に任せた方がよいというカテリーナの判断で、そのまま続けて園子が昭子を指導することになったため、昭子がカテリーナに師事したのは結果的に実質3年ほどということになった。しかし、その限られた期間にカテリーナから仕込まれた基礎はピアニストならびに教育者としての昭子を支え、そ

---

<sup>38</sup> 倉田喜弘監修『昭和前期音楽家総覧』—『現代音楽大観』—』下巻、ゆまに書房、2008年、123頁。

<sup>39</sup> 松本、前掲書、14-15頁。

<sup>40</sup> 同上書、68頁。

<sup>41</sup> 同上書、67頁。

<sup>42</sup> 同上書。

の教え子にも受け継がれているという<sup>43</sup>。

桁外れの才能を示した井上園子は別格であったが、カテリーナは園子以外の生徒たちにも、可能な限り人前で弾く機会を与えようとした。その教育方針の表れが次節に述べる毎年のピアノ発表会の開催であるが、特によく弾ける生徒にはプロのオーケストラとの共演機会すら与えている。1929年6月8日、日本青年館で開催された近衛秀麿指揮の「新響 東京慈恵院建設資金募集演奏会」に西園寺春子、高木エミ子の二人が園子とともに出演し、バッハの「3台のピアノのための協奏曲第1番ニ短調 BWV1063」を演奏している（文末の【写真1】を参照）。これは関東大震災で消失した東京慈恵会医院の建設資金支援のためのチャリティーコンサートであったが、当日は東京慈恵会総裁の竹田宮故恒久王妃をはじめ北白川宮美年子・佐和子両女王、朝香宮妃久子・湛子両女王、徳川喜久子姫ら皇族がそろって臨席し、徳川家達会長による開会の辞で始まるという本格的なものであった。そのような場への門下生の出演は、カテリーナが単なるピアノ教師ではなく現役のピアニストとして近衛や新響と共演を重ね、来日して間もない頃から続けてきた慈善活動などを通して皇族・華族と親交があり、ことに東京慈恵会に関してはその終身会員になっていたという、日本社会におけるカテリーナの幅広い活動があったからこそ実現したと考えられる。

それにしても、楽器や練習場所などの環境がまだまだ整っていなかった時代に、3台のピアノによる協奏曲は、練習からして容易ではなかったろう。オーケストラとの共演は音楽学校の学生でさえ難しかった時代に、趣味でピアノをやっている妙齡の令嬢たちが出演するということで話題が先行し、事前に新聞の取材を受けたりしていたが、結果は新響の機関誌『フィルハーモニー』誌上で「見事な演奏ぶり」と賞賛されるという上々の出来映えであった。この日は、カテリーナ本人もアントン・ルビンシテイン「ピアノ協奏曲第1番」を演奏しており、バッハもルビンシテインも日本初演という意欲的なプログラムであったことは注目に値する<sup>44</sup>。

この演奏会に出演した西園寺春子は、1913年生まれということから考えると、カテリーナの最初期の生徒の一人と思われる。元老西園寺公望を祖父に、その養嫡子の西園寺八郎を父に持つという、名家の令嬢であった春子はプロの音楽家の道には進むことなく住友家の御曹司に嫁いでいるが、カテリーナ門下では抜きん出た実力の持ち主の一人であったようだ。2年後の1931年5月9日に「日本結核予防協会事業基金募集の為めの管弦楽とピアノの夕」に再び師カテ

---

<sup>43</sup> 同上書、68-70頁。

<sup>44</sup> 『フィルハーモニー』1929年第4巻7号。

リーナとともに出演し、近衛秀麿指揮の新響とモーツァルトの「二台のピアノのための協奏曲」を演奏している<sup>45</sup>。カテリーナにとってはこれが日本の聴衆の前で弾く最後の演奏会となった。

## (2) 花園会ピアノ発表会

1924年6月10日付『東京朝日新聞』朝刊に、「廣岡氏邸音楽小会」という見出しの小さな記事が載っている。「トドロキツチ夫人の門下生は十四日午後二時半麻布材木町廣岡氏邸にて音楽小集会を催す」という、カテリーナ門下生たちのピアノ発表会の予告記事である<sup>46</sup>。1924年6月といえば、大震災からまだ9か月しか経っておらず、東京市中にはその傷跡が生々しく残り、カテリーナも自身の演奏活動を中断していた時期である。このときの「音楽小会」がカテリーナの門下生の最初のピアノ発表会だったのかどうかは定かではない。しかし、この記事からは、門下生が少なくとも1924年時点ですでに発表会を開催できるだけの人数に達していたことがわかる。カテリーナが演奏活動と教育活動を両立させながらも、演奏家からピアノ教師へと仕事の重心を移しつつあったことの証左とも言えるかもしれない。

これもいつの時点かは不明であるが、カテリーナの教室は「花園会」と名付けられ、前田美意子によれば、毎年6月の発表会開催が恒例になり、会場も麴町区三年町の華族会館になった。いわゆる町のピアノ教室の発表会とはいえ、会員以外には使用不可能な華族会館に政財界人の有力者や皇族・華族が集う「花園会」のそれは、あたかも上流社会の社交場のような雰囲気だったという。カテリーナが離日した年、1940年6月29日に開かれた花園会最後の発表会の様子を美意子が活写しているのもその一節を引用する。時節柄、会場には軍服姿も

---

<sup>45</sup> 『フィルハーモニー』1931年第5巻6号。

<sup>46</sup> 翌6月11日付『東京朝日新聞』にも同内容の記事が掲載されている。「麻布材木町廣岡氏邸」というのは、日本の女性実業家の草分けである広岡浅子(1849-1919)の邸宅で、元々は関西在住の浅子が上京する折に滞在する別邸として使われていた。麻布材木町は現在の港区六本木6丁目にあたる。1924年当時は浅子の娘・亀子と娘婿・恵三の一家が住んでいた。浅子の依頼によりアメリカ人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(William Merrell Vories 1880-1964)が設計した3階建ての洋風建築で、外国人の訪問客も多く、ヴォーリズと妻・一柳満喜子の結構披露宴もここで行われたという。大震災にも耐え、同じ麻布区内の目と鼻の先の新竜土町(現在の港区六本木7丁目)に住んでいたカテリーナが、おそらくは近所のよしみで、グランドピアノを備えた邸内のリビングルームを発表会の会場として借り受けたものと思われる。大同生命ホームページ(<https://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/column/27.html>) および

『ザ・AZABU』Vol.35、港区麻布地区総合支所、6頁：  
<https://www.city.minato.tokyo.jp/azabuchikusei/azabu/koho/documents/azabu35.pdf> (最終閲覧日はともに2023年12月31日)。

目立ち、年頃の令嬢たちの将来の配偶者候補である青年将校なども聴きに訪れ、互いに品定めをする場にもなっていたようだ<sup>47</sup>。

「何をしてるの、だめでしょう」と、トドロウィッチ先生が黒レースの裾の波打つフリルを蹴とばしながらやって来た。

牝牛のような胸にエメラルドが燦然と輝き、「マダム、素晴らしいペンダント！」と讃嘆しながら取り巻く娘達に、「そんなことどうでもよろし。サア早く並んで、出る順に。一番初めの人どこ？ 静かにしなさい。ベルですよ」毎年のことながら、先生が一番昂奮していた。私は八番目に並びながら、〔女子学習院の同級生の〕芳子は長門宮殿下が来られることを事前に知っていたに違いない、と思った。そして殿下は宮妃としてあの芳子をお選びになるのでは、と考えていた<sup>48</sup>。

もう一人、1940年の発表会について書き留めている人がいる。実業家・三井弁蔵の令嬢で、後に政治家の小坂徳三郎（1916-1996）の夫人となる三井且子（あさこ）である。且子は夫の没後に手ずから追悼論集を編集し、小坂と交際中だった若き日の思い出として、次のように記している。

次〔1940年〕の春、ピアノのおさらい会が、華族会館であり、親友の木戸笑子さんも恋愛中で、相談のうえ二人のボーイフレンドを招待することにしました。白い海軍の軍服姿が二人並んで華やかに客席の中に目立ちました。笑子さんは、ショパンコンチェルト、私はベートーベン第五を無事に弾き終えました。数日後厚い手紙が届きました。「僕は貴女に恋をした。驚いたかい」とあり「貴女の薄緑色のイブニング姿は美しい。目にはみえない程早く指が動いた」と褒めてくれました。音楽に深い関心はないようでしたが、その男らしい大きな字の手紙を大切に大切に毎日枕の下に入れて寝ました<sup>49</sup>。

---

<sup>47</sup> 酒井、前掲書、107頁。

<sup>48</sup> 同上書、110頁。カテリーナはこの頃にはそれなりに流暢に日本語を話すようになっていたようだ。レッスンも日本語で行われ、コミュニケーションに問題はなかった、と寺西昭子氏も証言している。

<sup>49</sup> 小坂且子編『追想 小坂徳三郎II』（非売品）、1999年、41頁。ちなみに、且子は母・三井栄子とともに日本の女性ゴルファーの草分けとしても知られ、ゴルフに関する入門書（『美しいゴルフ—伝説の女子アマが目指した気品の一打』ゴルフダイジェスト新書、ゴルフダイジェスト社、2007年）も書いている。

昭和戦前期のピアノ教室の生徒たちは、いったいどんな曲を習い、どんな曲を発表会で弾いていたのだろうか。昨今の音楽教室の多くがやっているように、カテリーナは毎回、日時と場所、演奏者と曲目の入ったプログラムを作成し、出演者の集合写真を撮影して生徒たちに配布していたようだ（文末の【写真3】を参照）。ここでは、筆者がたまたま入手することができた1937年（6月12日開催）、1940年（6月29日開催）の2つの発表会のプログラムで見てみたい。

### 【資料1】1937年の発表会プログラム

#### I Part

- |                               |                    |
|-------------------------------|--------------------|
| 1. Little Song (Czerny)       | Miss N. Grigorieff |
| 2. At the Fountain (Reinhold) | Miss K. Kido       |
| 3. La Gazelle (Wollenhaupt)   | Miss H. Ono        |
| 4. Concerto A-dur (Mozart)    | Miss A. Ito        |

#### I Part

- |   |                |
|---|----------------|
| 5. Romance (Tschaikowsky)                   | Miss M. Itoi   |
| 6. Sonate d-dur (Schubert)                  | Miss E. Kido   |
| Con moto                                    |                |
| 7. Concertstück (Weber)                     | Miss A. Mitsui |
| Larghetto ma non troppo-Allegro passionato. |                |
| Tempo di marcia. Presto.                    |                |

#### *Interval*

#### II Part

- |                                  |                     |
|----------------------------------|---------------------|
| 1. Sonate d-moll (Beethoven)     | Miss Takako Orimoto |
| a) Largo Allegro                 |                     |
| b) Allegretto                    |                     |
| 2. Concerto g-moll (Mendelssohn) | Miss A. Kamijo      |
| a) Andante                       |                     |
| b) Presto                        |                     |
| 3. Prelude (Rachmaninoff)        | Miss T. Tajima      |
| 4. Concerto C-moll (Beethoven)   | Miss T. Kido        |

Allegro con brio

5. Capriccio brillante (Mendelssohn) Miss M. Ashida

Andante Allegro con fuoco

6. Etude Des-dur (Liszt) Mr. M. Shinoe  
7. Fantasie C-dur (Schumann) Mr. S. Takemura  
8. Rigoletto-Paraphrase (Liszt) Miss Toyoko Orimoto

【資料1】の1937年の発表会のプログラムからは、現在の発表会と同じく、年少者と思しき生徒から順に弾いていることが見て取れるが、出演者の演奏曲目を見ると、「お嬢さん芸」ではとても弾きこなせないような大曲難曲がずらりと並んでいる。名前がローマ字表記のみで下の名前はイニシャルしか記されていないため、まだ出演者の一部しか特定できていないが、現時点での調査結果をここに紹介する。

第一部の4番目にモーツァルトのイ長調の協奏曲を弾いている A. Ito は伊東（寺西）昭子である。昭子は先に述べた猛練習の成果を披露したこの発表会のことを鮮明に覚えていた<sup>50</sup>。二台ピアノによる演奏で、オーケストラ・パートはカテリーナ先生が弾いてくれたという。昭子によると、2番目の出演者 K. Kido は、木戸幸一の三女の木戸和子、すなわち後に平成天皇の皇后美智子の女官長を務めることになる井上和子（1926-2014）である。また、三井且子が回想の中で触れている木戸家の次女の笑子は、この年の発表会にも出演していたことがわかる。6番目にシューベルトのソナタを弾いている E. Kido である。昭子の記憶では、この年は木戸家の三姉妹が三人とも参加しており、昭子の記憶が正しければ、もう一人の木戸、ベートーヴェンの協奏曲を弾いた第二部4番目の T. Kido が、三姉妹の長姉の由喜子ということになるが、ファーストネームのイニシャルが合致しない。イニシャルからすると、T. Kido は三姉妹の母親でカテリーナの初期の生徒だった木戸ツルという可能性もなくはないが、裏付けとなる資料はない。

第二部5番目にメンデルスゾーンの「華麗なカプリッチョ」を演奏している M. Ashida は、外交官から政治家に転身し戦後に首相をも務めた芦田均（1887-1959）の長女・美世（1919年生まれ）である。美世の子息の下河邊元春氏によると、美世は外交官としての芦田の最後の任地となったベルギーでピアノを習い始め、将来はピアニストになることを夢見ていたという。最初の赴任先ロシ

---

<sup>50</sup> 寺西昭子氏へのインタビューより（2016年2月11日実施）。



アでオペラに魅せられて以来クラシック音楽を愛好していた芦田は、帰国後も娘がピアノを続けられるように自ら先生を探し、習うなら本場を知る西洋人の教師のほうがよいということでカテリーナの門をたたいた。ピアノも娘からねだられるままに高価なスタインウェイを大枚はたいて買い与え、美世は結婚後も大切に弾き続けたという<sup>51</sup>。芦田は大変な子煩悩で、子どもの習い事にかけては妻より熱心でレッスンの送り迎えも自らかつて出たというから、おそらくは美世の演奏も激務の合間に聴きに來ていたに違いない。

この1937年の発表会でもう一つ興味深いのは、豊子・孝子の織本姉妹が出演していることである。というのは、織本姉妹は前年の1936年に、カテリーナには内緒でロシア生まれのドイツ系ユダヤ人ピアニスト、レオニード・クロイツァー（1884-1953）の演奏を聴きに行き感銘を受け、その後二人そろってクロイツァー門下に入ったとされているからである<sup>52</sup>。ところが、姉の豊子はこの1937年の発表会でリストの「リゴレット・パラフレーズ」を弾いてトリを務めているばかりか、次に述べる1940年の花園会最後の発表会にも、姉妹の一人が出演している。姉妹はカテリーナとの関係を断ち切って移籍したわけではなく、

---

<sup>51</sup> 下河邊元春氏への電話インタビューより（2023年4月24日）。下河邊氏は文献資料には書かれていないエピソードの数々を紹介して下さり、発表会の集合写真で母・美世の特定にもご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。下河邊氏によると、美世は、ピアニストで国立音楽大学教授の青木和子（旧姓・荒木、1911-2005）と親交があり、事あるごとにカテリーナの思い出話を交わしていたという。青木はおそらくカテリーナに師事したことはなく、両者の接点は不明であるが、下河邊氏は、その話しぶりから青木がカテリーナをよく知っているという印象を受けたと語っている。青木和子については、山本尚志「昭和戦前期にピアノを弾いた少女たちの人生と家族と憧憬」『学習院高等科紀要』第12号、2014年、81-99頁、玉川裕子『「ピアノを弾く少女」の誕生 ジェンダーと近代日本の音楽文化史』青土社、2023年、284-285頁を参照。

<sup>52</sup> 萩谷、前掲書、146-150頁および329頁。萩谷はカテリーナが自分の門下生をクロイツァーから遠ざけようとした理由を「トドロヴィッチ女史は同じロシア出身ということもあってクロイツァーの来日にはかねてから非常に神経を尖らせ、豊子たち門下生に対して、クロイツァーの演奏会に足を運ぶことを牽制していた」（147頁）と説明しているが、単に同じロシア出身だからというだけのライバル意識からとった行動だったとは考えにくい。2016年に発表した拙稿で明らかにしたように、カテリーナは確かにロシアから来日してはいるが、民族的にはロシア人ではなくベッサラビア出身のユダヤ人であった。日本ではユダヤ人という出自を自ら明かすことはなく、「白系ロシア人」と呼ばれるようになるとあえてそのままにしていたと考えられる。1933年1月のヒトラー政権の成立後、4月には早くもユダヤ人の公職追放が始まり、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害が急激に強まるなかで、家族や親類縁者をウクライナやルーマニアに残してきていたカテリーナが何かの拍子に素性を知られて彼らに危害が及ぶのを恐れ、ロシア出身であるばかりでなくドイツを拠点に活動していたクロイツァーに対して警戒感を持って接したのはむしろ当然だったと思われる。

『中欧研究』第7号（2023年12月）

クロイツァー門下となっても両者の縁は続いていたのかもしれない。  
次に1940年のプログラムを見てみよう。

## 【資料2】1940年の発表会プログラム

### I Part

- |                                 |                  |
|---------------------------------|------------------|
| 1. a) Air du dauphin (Roeckel)  | Miss Y. Maeda    |
| b) Souvenir (Yadassohn)         |                  |
| 2. Concert d-moll (Mozart)      | Miss T. Watanabe |
| 3. Barcarolle (Tchaikowsky)     | Miss K. Isshiki  |
| 4. Krönungs-Concert (Mozart)    | Miss H. Ono      |
| Allegro                         |                  |
| 5. Valse (Moszkowski)           | Miss M. Itoi     |
| 6. Concert g-moll (Mendelssohn) | Miss E. Kido     |
| Molto Allegro                   |                  |
| Andante                         |                  |
| Vivace                          |                  |

### *Interval*

### II Part

- |                                      |                   |
|--------------------------------------|-------------------|
| 1. Concert Es-dur (Beethoven)        | Miss A. Mitsui    |
| 2. Etude Des-dur (Liszt)             | Mrs. M. Shimokobe |
| 3. Concert D-moll (Rubinstein)       | Mrs. H. Ikeda     |
| 4. Fantasie (Schumann)               | Miss T. Orimoto   |
| 5. Mephisto-Valse (Liszt)            | Mr. S. Takemura   |
| 6. a) Valse E-moll (Chopin)          | Mrs. Sonoko Inoue |
| b) Nocturne E-dur (Chopin)           |                   |
| c) Militaire March (Schubert-Tausig) |                   |

この年の「ピアノのおさらい会」に出演したと回想記に書いた三井且子は、確かに第二部のトップバッターとして登場しており、記述のとおり、ベートーヴ

エンの協奏曲を弾いている。且子の親友の木戸笑子も第一部の 6 番目に登場しているが、プログラムの演奏曲目はショパンではなくメンデルスゾーンの協奏曲となっている。この年の発表会での演奏順が 8 番目だったと回想した前田美意子自身が弾いた形跡は見い出せないが、第一部の最初に Y. Maeda という名前があり、もしかしたら妹の瑤子か弥々子の晴れ舞台を見に来ていたということかもしれない。

カテリーナの離日（1940 年 7 月 31 日）の約 1 か月前に開かれたこの発表会は、門下生の成果発表というより告別演奏会の意味合いが強く感じられる。第二部の 2 番目にリストの練習曲（作品番号は未詳）を弾いている M. Shimokobe は、1937 年の発表会にも出演した芦田美世である。子息の元春氏によると、母親の強い反対もあってピアニストの夢を断念した美世は、1937 年の発表会の後に結婚して下河邊（しもこうべ）姓となり、1940 年の発表会の時は 2 月に元春氏を出産したばかりだった。慌ただしい育児の合間を縫って懸命に練習し、カテリーナ先生とのお別れに駆けつけたことは想像に難くない。また、12 人の出演者のうち半数近くの 5 人が協奏曲を弾いており、ことに第二部 3 番目の H. Ikeda が演奏したルビンシテインのニ短調の協奏曲は、カテリーナが日本初演した思い入れのある曲でもあった<sup>53</sup>。第二ピアノの演奏者はプログラムには記されていないが、生徒たちはカテリーナ先生との最後のアンサンブルを楽しんだのだろうか。5 番目に出演した唯一の男性 S. Takemura<sup>54</sup>が弾いたのは独奏曲であるが、カテリーナが得意とした作曲家であるリストの作品「メフィストワルツ」であった。そして、ショパンのワルツとノクターン、シューベルト（タウジヒ編曲）「軍隊行進曲」の 3 曲を弾いて最後を飾ったのは、すでに押しも押されぬプロのピアニストとして活躍していた井上園子であり、カテリーナの日本におけるピアノ教師としての幕引きにふさわしいフィナーレとなった。

---

<sup>53</sup> この Mrs. Ikeda がどのような経歴の人物かは不明であるが、カテリーナが「池田先生」と呼んでいたことからすると、もしかしたらピアノ教室と一緒に教えていたのかもしれない。カテリーナの渡米後、生徒たちの指導を引き継いだ可能性もあると思われるが、推測の域を出ない。

<sup>54</sup> 寺西昭子によると、1937 年の発表会にも出演した S. Takemura は実力のある生徒だったが、太平洋戦争中に召集されて戦死したという。1940 年の発表会は、出征を前にした彼自身にとっても告別演奏会となったのである。

## 6. 1930年代の動静

### (1) 弟アニシムの来日をめぐって

1929年、夫ドゥシャンは東京外国語学校の勤続20年を祝い、カテリーナもピアニスト、ピアノ教師という二つの活動がかみ合って充実の時を迎えていた。ところが、その二人を突如大きな悲劇が襲う。9月28日、アメリカの大学で学生生活を送っていた末っ子のヴィクトルが21歳の若さで交通事故死したのである。二人の間に生まれた唯一の息子を失った悲しみはいかばかりであったか、察するに余りある。実はその前年、二人は1928年の夏休みをアメリカで息子たちと一緒に過ごしており、家族の楽しげなスナップ写真が何枚も残っている。ヴィクトルの訃報を受け取った後、ドゥシャンもカテリーナもすぐには駆けつけることができず、翌30年の夏休みによく渡米している。トドロヴィチ家の息子たちは両親の渡米の折には兄弟そろって二人を迎えていたが、この年はいちばん年若いヴィクトルの墓前に一家が参集することになったのである。

同じ1930年、ヴィクトルを失ったショックから立ち直る間もなく、一家の上にはまたもや暗雲が立ちこめる。実は、この年の秋、カテリーナの末弟アニシム・シュレジンガー（Anisim Schlesinger 1890-1939）が新交響楽団の客演指揮者として来日するという話が進んでいた。アニシムはスイスのベルン大学で医学の学位を取得した医師であり、第一次世界大戦時には軍医として従軍している。1923年にはソヴィエトの赤衛軍の軍医となったが、その傍ら音楽もよくし、指揮者・作曲家としても知られる存在であったという<sup>55</sup>。遺族のもとには、新響指揮者の近衛秀麿、事務局長の原善一郎とアニシムの間で取り交わされた1930年3月15日付の契約書が残っている<sup>56</sup>。名前は出てこないが、近衛と懇意にしていたカテリーナが間に立って進めた話であることは明白である。契約書には、

- ① アニシム・シュレジンガー氏は、新交響楽団が東京で開催する5公演の客演指揮者として招聘される
- ② 5公演のプログラムはシュレジンガー氏が決定するものとするが、ロシアの作曲家の作品であることが望ましい
- ③ 公演は1930/31年シーズンの、シュレジンガー氏の到着から1か月以内、かつ1930年12月15日以前に行うものとする。具体的な日程については新響事務局が指定する

---

<sup>55</sup> カテリーナの曾孫マイケル・トリップ（Michael Tripp）氏がカテリーナの末妹エリザベータの曾孫にあたるイスラエル在住のロマン・コルニェフ（Roman Kornev）氏から得た情報による。

<sup>56</sup> トリップ氏所蔵資料。

④ シュレジンガー氏には報酬として 2000 円を支払う。そのうち 1000 円は本契約書の署名時に支払い、残額は契約内容の履行後に支払うものとするという 4 つの条件が定められている。

遺族が保管するもう一つの文書、在オデッサ田中文一郎領事から原事務局長に宛てられた 1930 年 6 月 30 日付諸第 11 日号「「契約書及領収証送付ノ件」という報告文書には、「当館田中領事在京中貴殿ヨリ申出アリタル当地『アニシム、シュレージンゲル』氏本邦招聘ニ関スル同氏トノ契約書ハ本月二十七同氏ヲ当館ニ招致シ署名セシメ御送付ノ金千留ニ対スル為替券ハ之ヲ同氏ニ手交シ領収書ヲ徴シタリ依テ右契約書及領収証各一通別紙ノ通茲ニ送付ス」とあり、6 月 27 日の段階でアニシムがオデッサの日本領事館に赴き、確かに上記④が履行されたことがわかる<sup>57</sup>。

原事務局長は『フィルハーモニー』1930 年 7 月号掲載の新シーズンの客演指揮者に関する紹介記事に「ロシアの指揮者にも目下交渉中です」と書いており、この時点では新響側でも確かに受入れ準備が進んでいた。すでに述べたように、カテリーナはこの年の夏を急遽アメリカで過ごすことになったのだが、出発前にアニシムの来日の道筋がつき、その意味では安心して旅立ったと思われる。同誌 9 月号「事務所より」には、原が「近く来朝の予定のロシア オデッサのシレージンゲル氏」とアニシムの名前を出して予告を書いている。同号掲載の「昭和五年十月新響予告」を見ると、アニシムは 10 月 15 日の「第 75 回予約演奏会」に出演することが決まり、曲目の記載はないものの「露西亜音楽の夕」となるはずであった。しかし、『フィルハーモニー』1931 年第 5 巻第 7 号に掲載された「新響定期演奏会覚書及び曲目一覧」を見る限り、アニシムが「第 75 回予約演奏会」に出演した形跡はない。ラウトロプ<sup>58</sup>という他の指揮者に代わっていて、ニールセン、フォーレ、ラヴェル他という別の曲目が演奏されているからである。理由は不明だが、ソ連政府はアニシムの出国を許可しなかった。『フィルハーモニー』1930 年第 4 巻第 12 号には、原が「先にお知らせした指揮者シレージンゲル氏は外国旅券、査証等の関係上目下来朝に困難を来しております。先方か

---

<sup>57</sup> 報酬の金額が契約書では 1000Yen (円)、田中領事からの報告文書では 1000 留 (ルーブル) となっているが、そのいきさつは不明。

<sup>58</sup> 東京音楽学校のデンマーク人教師、チャールズ・ラウトロプ (Chales Lautrup 1894-没年不詳) のこと。アニシムが予定通りに来日できなくなったため、東京にいたラウトロプが急遽代役を引き受けたものと思われる。ラウトロプは日本側からの招きで 1926 年に来日し、東京音楽学校では 1931 年まで主に唱歌と管弦楽を担当した。大礼奉祝演奏会や御前演奏会の指揮者も務めている。東京芸術大学未来創造継承センター大学史史料室「音楽取調掛と東京音楽学校の外国人教師たち」:

<https://archives.geidai.ac.jp/contents/1-2/> (最終閲覧日: 2023 年 12 月 31 日)。

ら吉報のあり次第改めてお知らせいたします」と報告しているが、その「先方からの吉報」が届くことはついになく、アニシムの来日はそのまま立ち消えになったものと思われる。

前出のトリップ氏によると、この話には続きがあり、単にアニシムの来日中止では終わらなかったという。上記のように、結局は実現することのなかった日本への演奏旅行のために、アニシムは日本のスパイという疑いをかけられ、ソ連当局によって逮捕拘留されることになったというのである。その理由というのはこうだ。アニシムは1929年、在オデッサ日本領事館のノグチという秘書官の誘いで日本の諜報活動に引き込まれ、黒海沿岸の防空と動員態勢に関する資料を収集していた。ミタニという日本軍の情報将校の指示でニコラエフ（ウクライナ語ではミコライウ）に諜報組織を作り、自分の妻もスパイ網に引き入れた。この話のどこまでが本当なのか、あるいはまったくのでっちあげだったのかを知る手がかりは今のところ見出していない。しかし、いずれにせよ夫婦が二人とも逮捕され、アニシムは1939年4月7日にラーゲリ（強制労働収容所）収容10年の刑を宣告されて、その年に亡くなったとみられる。トリップ氏によると、アニシムは刑期が終わったはずの1948年に生存情報があり、ラーゲリの過酷な収容生活を生き延びた可能性もあるというが、いずれにせよ、新響との出演契約を発端として彼の運命が暗転し、人生が破壊されてしまったのは事実である。

スターリン体制下、カテリーナの弟妹が暮らしていたウクライナはとりわけソ連政府の締めつけが厳しく、1932-33年にはホロドモールと呼ばれる飢餓にさらされた。トリップ氏によると、カテリーナが日本から送った食料が、かろうじて家族と近隣の人々の命をつないだのだという<sup>59</sup>。カテリーナがアニシムを日本に呼ぼうとしたのは純粋に音楽家として日本に紹介したいという意図からだったのか、それとも家族をそういう過酷な環境から救い出すための糸口にしようとしたのか、それは定かではない。日本にいるカテリーナには追求の手が及んだり、取り調べを受けたりはしなかったのだろうか。いずれにしても、家族を思って行動したはずのカテリーナに突きつけられたのは、あまりにも残酷な結末であった。

## (2) 1930年代の演奏活動

1920年代末、カテリーナが演奏家として、またピアノ教師として深い関わりを持っていたヨゼフ・ケーニヒが、まったく思いがけない形で日本を去ること

---

<sup>59</sup> トリップ氏へのメールでのインタビュー（2016年6月28日）より。

になる。1929年4月14日、ケーニヒの楽壇生活35周年を祝う記念演奏会が、昼夜にわたり華やかにとり行われた。昼の部終了後の記念式典では、この演奏会の主催者でもあった在日チェコスロヴァキア公使が挨拶に立ち、「同国人の日本で祝される事を喜び、日本とチェッコとが益々親善に向ふことであらうことを述べて記念品をケーニヒ氏に手交」している<sup>60</sup>。若くして故国を離れたきり、故国の独立後も一時帰国さえかなわずにいたケーニヒにとって、このチェコスロヴァキア公使の言葉はひときわ感慨深いものがあったろう。ケーニヒ特集を組んだ『フィルハーモニー』1929年第4巻第4号(4月号)には、大らかでユーモアに富む好人物のケーニヒを慕う大勢の人々がエピソードを寄せている。ケーニヒにとって、この1929年はまさしく人生最良の年とっていい年になるはずであった。ところが、おそらくは誤解から始まったケーニヒの女性スキャンダルが警察沙汰に発展し、祝賀演奏会からわずか2か月後の6月30日、ケーニヒは国外追放も同然の形でハルビンへ去ることになる<sup>61</sup>。彼はこの後一度も日本を訪れることはなく、1932年12月5日、腎臓結石のためハルビンで帰らぬ人となる<sup>62</sup>。トドロヴィチ夫妻は1934年に日本赤十字社の依頼でハルビンへ視察旅行に行っているが、ケーニヒとの再会がかなうことはなかったのである。

ケーニヒの後任として新交響楽団の専属指揮者、JOAKの専属アーティストに迎えられたのは、ロシア人ヴァイオリニストのニコライ・シフェルブラット(Nicolai Schifferblat 1890-1936)であった。彼はケーニヒが次席コンサートマスターを務めた1925年5月の「日露交歓交響管弦楽演奏会」で、同じくロシア側のメンバーとして参加し首席コンサートマスターを務めた人物である。1929年4月、東京高等音楽学院(1926年4月創立、国立音楽大学の前身)の招聘教授として再び来日した<sup>63</sup>ところ、新交響楽団がケーニヒの退任で突如空席となった専属指揮者のポストを埋めるべく、急速にシフェルブラットの獲得に動いたものらしい。

カテリーナは、4月5日に帝国ホテルで開かれた歓迎会に夫妻で出席しており<sup>64</sup>、以後、家族ぐるみの親交を持つことになる。シフェルブラットはロシア人とはいっても生まれはリトアニアのヴィリニユスであり、お互いロシアの西部

---

<sup>60</sup> 『フィルハーモニー』1929年第4巻第5号、13頁。

<sup>61</sup> この顛末については、以下に詳しい。白濱辰三「何がケーニヒ氏を帰国せしめたかーケーニヒ氏帰国問題の真相」『フィルハーモニー』1929年第4巻第8号、7-10頁；岩野裕一、前掲書、64-69頁。

<sup>62</sup> 『フィルハーモニー』1933年第7巻第1号、33頁。

<sup>63</sup> 大津三郎「シフェルブラットさん!」『フィルハーモニー』1936年第10巻第10号(11月)、44頁。

<sup>64</sup> 『フィルハーモニー』1929年第4巻第5号、13頁。

辺境の出身ということですからすぐさま打ち解けたのではないかと想像する。セルビア人のドゥシャンがペテルブルク大学卒業後にリトアニアに隣接するラトヴィアで教師をしていた<sup>65</sup>ことも奏功したのではなかろうか。カテリーナにとって、ケーニヒの解任は誠に不運であったが、後継がシフェルブラットだったことは誠に幸運だったと言うべきであろう。

実は、日本における最後の10年間、カテリーナはコンサートには数えるほどしか出演していない。これには、ピアノ教授に多くの時間を費やすようになったことに加え、世代交代が進み愛弟子の井上園子を筆頭格として若手の出演機会が増えたこと、海外から著名な音楽家の来日が相次いだこと、さらには加齢による衰えなども加わったのかもしれない。前節で述べた家庭内の不幸な出来事も影響しなかったはずはない。

現時点で筆者が把握する限り、1930年代にカテリーナが出演した演奏会は、門下生の西園寺春子とともに出演した既述の1931年5月9日のチャリティーコンサート以外にはわずか2つだけであるが、注目に値するのは、その2回がともにシフェルブラットとの共演であったことである。

初共演となったのは、1930年4月27日に日本青年館で開かれた「ソナタの夕」である。シフェルブラットのヴァイオリン、カテリーナのピアノで、シューマンの作品121ニ短調、ハンガリーの作曲家エルンスト・フォン・ドホナーニ（Ernst von Dohnányi 1877-1960）の作品21嬰ハ短調、ベルギーの作曲家ヴィクトル・ヴルース（Victor Vreuls 1876-1944）のロ長調という、3つのヴァイオリン・ソナタの日本初演を一夜にして行うというものであった。この演奏会は好評を博し、新聞紙上でも取り上げられた。少々長い、牛山充が5月3日付『東京朝日新聞』朝刊に寄せた「室内楽会二つ」と題する批評の一部を引用しておきたい。

もう一つはシフェルブラット氏とトドロキツチ夫人とのソナタの夕で、これもまた喜ぶべきものであった。曲はドナーニとシューマンとブルースの提琴奏鳴曲で、三つとも我邦における初演物ばかりであった。両家の技量は既に定評がある。確かな解釈と確かな腕、聴衆は皆大船に乗った心地で安心して聴ける。三つの中でシフェルブラットが幾分劣ってゐるやうであった。殊に第一楽章の解釈が平板に流れ、全曲の印象を弱めたのを惜しむ。

しかし最後のブルースは当夜の白眉と称するに足る立派な大演奏といふを惜まない。かつてスコラ・カントルムに教鞭を執って令名あった白国の

---

<sup>65</sup> Majdanaц, op.cit., p.13.



作家のペンより生まれた唯一の提琴奏鳴曲<sup>66</sup>がかくも秀でた初演を我邦において与へられたのは提琴演奏史上特筆すべきことである。

ここにはカテリーナの演奏家としての成熟をみることができるが、二度目にして最後のシフェルブラットとの共演もまた、カテリーナの演奏家としてのキャリアを締めくくるにふさわしいものとなった。1930年12月14日、日本青年館で開催されたシフェルブラット指揮の新響第80回予約演奏会で、カテリーナはリムスキー・コルサコフのピアノ協奏曲嬰ハ短調を弾いている<sup>67</sup>。この曲も日本初演であり、彼女はその人生そのものを象徴するかのようになり、音楽家としても最後までチャレンジの姿勢を貫いた。翌31年5月、既述のチャリティーコンサートでも近衛秀麿とこの曲を演奏し、日本の聴衆に別れを告げることになる。

カテリーナのピアニスト人生の最後を彩ったシフェルブラットとの縁も、そう長くは続かなかった。1936年10月14日、シフェルブラットが持病の喘息の発作により46歳の若さで急死したためである。訃報に接したカテリーナは真っ先に五反田の自宅に駆けつけ、悲しみにくれる夫人を支えて葬儀の段取りをつけている<sup>68</sup>。翌37年3月4日には日比谷公会堂で「故ニコライ・シフェルブラット先生追悼演奏会」が開催され、カテリーナ自らは演奏こそしなかったものの、収益の約4分の1にあたる444円（現在の約30万円）を寄付し、会の終了後に純益の全額が遺族に寄贈された<sup>69</sup>。また、井上園子、北澤栄というカテリーナゆかりの二人が独奏者として出演しており、企画段階からカテリーナが関わったのは明らかである。二人はローゼンシュトック指揮の新響とそれぞれウェーバー「コンチェルトシュトゥック」、ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」「ローエングリン」からアリア各1曲を演奏し、シフェルブラット門下生たちによるバッハ「前奏曲ホ長調」のヴァイオリン合奏とともにラジオで日本全国に中継放送されている。

### (3) 離日

このように、カテリーナの日本滞在の終盤は新たな出会いと親しい人々との

---

<sup>66</sup> ヴルースが作曲した「唯一の提琴奏鳴曲」というのは誤りである。ヴルースはヴァイオリン・ソナタを、1899年作曲の第1番ロ長調、1919年作曲の第2番ト長調の2曲残している。この演奏会で弾かれたのは第1番ロ長調と思われる。『フィルハーモニー』1930年第4号（4月）参照。

<sup>67</sup> 『NHK交響楽団五十年史 1926-1977』日本放送出版協会、1977年。

<sup>68</sup> 『フィルハーモニー』第10巻第10号、1937年11月号、24-25ページ。この号はシフェルブラット追悼号であり、共演者、門下生、評論家などが多数寄稿している。

<sup>69</sup> 『フィルハーモニー』第11巻、1937年5月号、32頁。

別れが交錯した。それは時に大きな痛みを伴うものとなったが、そうしたなかにあっても、彼女は自らの使命と受け止めたことを一つ一つ誠実に実行し、他者のために献身するという姿勢を崩さなかった。カテリーナはピアノ演奏と教育、夫ドゥシャンはロシア語教育というそれぞれの専門分野で大きな実績を残したばかりでなく、社会貢献や国際貢献においても重要な役割を果たしていたことから、二人はともに日本社会において人々の敬愛を集める存在となっていた。戦争が長引きさえしなかったら、日本でもそれなりの老後を送ることができたのかもしれない。しかし、彼らはそういう希望的観測や感傷にとらわれることなく、必要なときに必要な決断を下し、機を逃さず冷静に行動したからこそ、波乱に満ちた人生を生き抜くことができたのだと思える。

本論文で十分に検討できなかったことの一つに、カテリーナの国籍の問題がある。一家の来日後に第一次世界大戦とロシア革命が勃発し、戦後、二人が日本に在る間に国境線が引き直されて祖国の形が変わってしまったため、ドゥシャンもカテリーナも国籍の変更（選択）を余儀なくされることになる。結果から言うと、いつの時点かは不明であるが、ドゥシャンはユーゴスラヴィア（1918年の建国時はセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国）国籍、カテリーナはルーマニア国籍を取得したようだ<sup>70</sup>。1938年の夏休みに二人が移住の準備で渡米したことは先にも述べたが、このときすでにヨーロッパはナチス・ドイツの侵略が激化し、その魔手を逃れて安全に暮らせる国は無きに等しいという状況に陥っていた。特に、ユダヤ人であるカテリーナにとっては、日本からわざわざそのような場所に行くことは到底考えられなかったろう。ヨーロッパの祖国で老後を送るという選択肢を失った二人が、三人の息子たちの待つアメリカで暮らすことにしたのは当然の成り行きであったといえよう。

こうして、1940年7月31日、二人は30年あまりにわたって住み慣れた日本を後にする。この年の2月に満65歳を迎えたドゥシャンが東京外国語学校を定年まで勤め上げるのを待って日本を去ると決めたところが、いかにも真面目で律儀な二人らしい。出発の2か月前、5月26日には横浜のニューグランドホテルで花園会主催の送別会が開かれた。出席した30人あまりの生徒たちがローマ

---

<sup>70</sup> カテリーナが取得したアメリカの帰化証明書（Certificate of Naturalization）では、「以前の国籍 Former nationality」の欄が「ルーマニア Rumanian」となっている。ドゥシャンの帰化証明書は残っていないが、1940年7月31日に横浜から離日する際、アメリカ行きの「新田丸」の乗船名簿に国籍をユーゴスラヴィアと書いている。柴 宜弘「ロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィチと第一次世界大戦——辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ——」『中欧研究』第4号、城西大学中欧研究所、2018年12月、24頁を参照。

字やカタカナでサインを寄せ書きした色紙が残っている。そして、それからひと月後の6月29日、第5章に詳述した花園会恒例のピアノ発表会を最後に、カテリーナは日本におけるすべての活動を終えたのであった。

トドロヴィチ夫妻と親交のあった前出の『ポリティカ』特派員ヴケリッチが、夫妻の出発の日の光景を書き留めた記事がある。少し長くなるが、ここに引用しておく。

トドロヴィッチ教授が去って、ユーゴスラヴィアはこの地域に最も早くから滞在していた文化代表を失った。欧州の重要な国でありながら、ユーゴスラヴィアはまだ極東に公式の代表を置いていない。そうした事情なので、トドロヴィッチ氏は我が国の代表として招かれることも多かった。(中略) そうした仕事はいつも一銭の報酬も受けることもなく、しばしば持出しで引き受けたが、それには夫人の献身的な協力があつた。

トドロヴィッチ夫妻の離日は、極東の少数のユーゴスラヴィア人には大きな損失だ。だが、日本人が心から親愛の情を示すのを見ると、当地にも氏の活動を評価し離日を惜しむ人が大勢いたことが分かる。

トドロヴィッチ夫妻の出発の日、東京駅の光景は絵に描いたように鮮やかだった。夫妻の乗り込んだ車輛の周りには二百人を超える友人が集まっていた。制服姿の陸軍の将官や海軍提督、正装した各省の代表や大学関係者のほか、ほっそりした着物に身を包んだ貴族の令嬢の姿も多数見られたが、こちらはトドロヴィッチ夫人のピアノの生徒たちだ。政府関係者の先頭は文部省の代表で、トドロヴィッチ氏の離日に際し天皇陛下から贈られた瑞宝章を駅まで届けに来たのである。日本で外国の教育関係者に贈られた勲章としては、最高の勲章だ<sup>71</sup>。

横浜港から乗船した「新田丸」には、シロタ夫妻が軽井沢から送った送別の電報が届いた。「ご一家が再び合流し、米国での次の31年間も日本での31年間と同様に幸福なものになりますように」というシロタ夫妻のはなむけの言葉<sup>72</sup>の

---

<sup>71</sup> この記事は「日本からの手紙 露語を教えて滞日31年、ドゥシャン・トドロヴィッチ教授米国へ」というタイトルで同年9月8日付『ポリティカ』紙に掲載された。ブランコ・ヴケリッチ、山崎洋編・訳、前掲書、281-282頁。

<sup>72</sup> 1929年から日本に滞在していたシロタ夫妻はともにウクライナ出身のユダヤ人であり、トドロヴィチ夫妻とは約10年も滞日期間が重なっているが、両者がどのような関係にあつたのかを知ることでできる資料は見つかっていない。この電報は両者の間に個人的な付き合いがあつたという証左になる。

とおり、カテリーナは渡米後さらに30年余りを生きた。1963年には60年近く連れ添った最愛の夫ドゥシャンを送り、翌年には息子ドラグティンをも送って、1974年4月1日、静かに人生の幕を下ろす。生まれ故郷のベッサラビアを出て以来、いくつもの国境を越え、地球半周分もの距離を移動し、二つの大戦に翻弄されながらも力強く生き抜いた96年の生涯であった。

## おわりに

日本の西洋クラシック音楽受容史に名を残しながら、個人的な経歴がほとんど知られていないカテリーナ・トドロヴィチとはいったいどのような人物だったのか。今から10年近く前、調査を開始した2014年後半の時点でまず入手した日本語の資料から筆者が知り得たのは、カテリーナが「白系ロシア人」であるということだけであった。ところが間もなくして、トドロヴィチ一家が1917年のロシア革命より8年も前の1909年来日しているという事実が判明し、カテリーナに関する数少ない情報であったこの「白系ロシア人」説は最初から疑ってかからねばならなくなった。

それでは、ロシア1905年革命との関連はどうか。この時期の動静については今もって調査中であるが、少なくともわかっている限りでは、この時点でカテリーナが亡命者や難民としてロシア国内を移動したりロシアを去らなければならなくなったりしたという要因は見当たらない。ちょうどその頃知り合ったと思われる夫ドゥシャンは、セルビア人でありながら教師や官吏として帝政ロシアに仕える身であったが、彼が1909年という年来日することになったのは、ロシア語教師として日本側から招聘されたからであって<sup>73</sup>、ましてその夫に家族として同行する形で来ることになったに過ぎないカテリーナは、なおのこと「白系ロシア人」であるはずはないのである。ところが、それにもかかわらず、日本社会においてカテリーナは何故か「白系ロシア人」（ときには「白系ロシア人貴族」）として認識され、それが定着していった。

行論中明らかにしたように、カテリーナはベッサラビアの出身で、現在のルーマニアからウクライナにかけての一角が一族の生活世界であった。この地域がロシアの支配下にあった当時、国籍からいえば、カテリーナはたしかに「ロシア人」であったが、民族的にはロシア人ではなくユダヤ人であった。本稿でも触れたように、戦前の日本には、レオ・シロタやレオニード・クロイツァーら、日

---

<sup>73</sup> 柴 宜弘、前掲論文、13-14頁。

本に居を構えて活躍していたヨーロッパ出身のユダヤ人音楽家が少なからず存在した。しかし、カテリーナは、ユダヤ人でありながら「ユダヤ人音楽家」ではなく「白系ロシア人音楽家」として生きた。ピアノの教え子やその周辺に対して、それを自ら否定したり訂正したりした気配がない。むしろ、あえてなすがままにしたと感じられることにこそ、事の本質が潜んでいるように思える。

ナショナル・アイデンティティという点からみると、カテリーナのそれは「〇〇人」という一言で片付けられるような単純なものではなかったはずである。本稿で検討してきたように、日本に来てからの活動や人間関係を見るだけでも、彼女が多言語に通じたポリグロットであったことに疑いはなく、そもそもナショナル・アイデンティティの根幹をなす母語からして単一ではない。父親の母語のロシア語、母親の母語のルーマニア語、留学先のオーストリアで必要だったドイツ語に加え、生まれ育った地域の住民構成や生活環境からウクライナ語やイディッシュ語にも日常的に触れていた可能性がある。英語は来日前には学習機会がなかったかもしれないが、来日後に所属した在京の外国人婦人団体の共通語として使用していた形跡があり、渡米前からある程度は身につけていたと思われる。カテリーナの出自として事実とは異なる「白系ロシア人」が定着していったのは、カテリーナ自身が「〇〇人」という単一のナショナル・アイデンティティの持ち主ではなかったことと無関係ではないだろう。カテリーナが第一次世界大戦中に、あるときは「ルーマニア人」として<sup>74</sup>、あるときは「ロシア人」として<sup>75</sup>新聞のインタビューに答えていることにもそれはうかがわれる。東欧の実情が知られていたとは言いがたい当時の日本にあって、民族構成の複雑な東欧においてもとりわけ複雑な自分の出自について説明したところで、あまりにも状況の異なる日本の人々にすんなり理解してもらえとは期待していなかった、ということもあるかもしれない。白系ロシア人が大挙して日本にやってきた1910年代末～1920年代初頭が、ちょうど日本におけるカテリーナの演奏活動や教育活動が本格化していった時期と重なっており、ロシアから来たには違いないカテリーナもその一員として認識されていたのではないかと推測する。さらに、1930年代に入ってナチスが台頭してくると、ユダヤ人であることはあえて明かさないほうがいいという状況になる。

トドロヴィチ夫妻がいた頃の日本には、セルビア人やルーマニア人、ポーランド人やチェコ人といった東欧出身の人々は数えるほどしか住んでおらず、とうてい民族別や出身地別のコミュニティを作れるような人数ではなかった。し

---

<sup>74</sup> 柴 理子論文 (2016)、3-4 頁。

<sup>75</sup> 同上、19 頁。

かし、ともに東欧という、帝国と帝国の狭間の地域の出身者であるトドロヴィチ夫妻のもとには、自然と、その同じ狭間の地域からやってきた人々が集った。本論文の(1)で論じたピアニストのザレスカ<sup>76</sup>や指揮者でヴァイオリニストのドゥブラヴチッチ<sup>77</sup>、(2)で論じた指揮者のケーニヒやシフェルブラット、ジャーナリストのヴケリッチ、柴 宜弘がドゥシャンに関する論考<sup>78</sup>の中で交流関係を明らかにした言語学者のニクルらは、いずれもそういう意味で共通点を持つ人たちである。国別に編成された二国間の関係史をただ直線的にたどっていただけでは、こうした関係性は浮かび上がってこない。カテリーナという一個人の人物像を掘り下げていく作業を通して、東欧との交流史の研究に際しては、個人を分析対象とする場合であっても、既存・現存の国家のみならず、それらを含むより大きな地域もそこに重ねて論じることが不可欠であることを改めて認識させられた。

カテリーナの職業上の活動については、従来は「戦前の日本で上流階級の子女を教えたピアノ教師」という側面のみが語られることが多かった。本稿では、もう一つの側面であるピアニストとしての活動を、可能な限り資料を掘り起こして実証的に論じることによって、カテリーナが実際にははるかに多彩な活動を繰り広げていたことを明らかにした。その音楽史上の意義については音楽学の専門家の評価に委ねるしかないが、一言触れておこならば、彼女が上記の多彩な音楽家たちとの交流からも学びつつ、西洋クラシック音楽の古典的な作品にとどまらず、ロシア音楽を中心とする本邦未公開の作品や同時代の作品の紹介に努め、キャリアの終盤まで第一線のコンサート・ピアニストであるための自己研鑽を怠らなかつたことは特筆に値する。

第5章で見たように、カテリーナの生徒は基本的にほとんどが上流階級の子女だったとはいえ、ピアノを習う目的もピアノに寄せる思いも一様ではなかつた。カテリーナが終始自らも現役のピアニストであり続けたからこそ、ピアノ教師としても、良家の子女の「花嫁修業」や「お嬢さん芸」を見守るだけの存在にとどまることなく、生徒たちの才能を開花させ、今日の視点から見ても相当に高いレベルにまで導くことができたのではないだろうか。たまたま縁あって西洋クラシック音楽受容期の日本に来た外国人の、しかも女性の音楽家が、一貫して在野にありながら30年もの間、演奏と教育の両面で日本の楽壇に貢献し続けたことは他に例を見ない。それが第二次世界大戦後の日本の、特にピアノ

---

<sup>76</sup> 同上、21-24頁。

<sup>77</sup> 同上、10-15頁。

<sup>78</sup> 柴 宜弘、前掲論文、15頁。

教育の基礎を準備し、今日のピアノ界の発展にまでつながっていることを考えると、カテリーナの業績はもう少し評価されてよいのではないか。

トドロヴィチ夫妻がアメリカを最終移民先としたこと自体は、東欧移民としては一つの典型であって特に珍しいことではないが、ほぼ定住のような形で30年余りを日本で過ごしたのちに他国に再移民したという点から、きわめて特異なケースとなった。しかも、移住したのが1940年という日米開戦を目前にした時期だったために、日本は彼らにとり一転して敵国になる。半生を過ごした日本が戦火に飲み込まれていくのを、彼らは太平洋の対岸からどんな気持ちで見つめていたのか。二人がともに現役を退いていたこともあって資料的な制約は大きいですが、幾度も移動を重ねたカテリーナの人生の最後の舞台となったアメリカでの動静を少しでも明らかにすることが、筆者に残された課題である。

### 【写真1】

「新響 予約演奏会第29回」（1928年5月16日 日本青年館）の舞台写真。指揮・近衛秀麿、ソプラノ独唱・オルガ・カラスロヴァ、ピアノ独奏・カテリーナ・トドロヴィチ。



【写真2】

近衛秀麿指揮「新響 東京慈恵院建設資金募集演奏会」（1929年6月4日 日本青年館）に出演した3人の門下生と楽屋にて（左から井上園子、西園寺春子、カテリーナ、高木エミ子、近衛秀麿）





【写真3】

花園会ピアノ発表会の集合写真の一枚（華族会館 1930年代前半？）

前列左から木戸笑子、前田美意子と妹・瑤子？、カテリーナ、木戸和子、右端が木戸由喜子、後列左から2番目が織本豊子？、右端が芦田美世。



※写真1～3はいずれも Dana Todorovic 氏が提供して下さったものである。記して感謝の意を表する。